中国で一番美しい村・丹巴（タンバ）訪問の旅（写真による旅日記）①

2016年2月5日～13日（参加8名）

2016年11月号で、呼びかけた「大川健三さんの案内で行く丹巴の旅」に行ってきました。春節の丹巴の村は、まだ緑は萌していませんでしたが日中は思ったよりも暖かく、山の斜面のあちこちに、へばりつくように建てられた村人の建物が春の陽射しの中で輝き、どこを切り取ってもまるで絵はがきの中の風景のようでした。春節で着飾った村人たちの表情は明るく優しげで、目と目が合うとにっこり微笑んで歓迎の挨拶をして貰っているようでした。

■2月6日（月）成都　晴

2016年2月6日未明、成都双流国際空港着。元・陽光新聞社の副編集長・三好隆盛（劉怡祥）さんが手配下さった成都安怡国際旅行社送迎車が待っていた。大川健三さんは仕事でこの日の夕方でなければ成都に来れないので、この送迎車に乗ってすでに予約下さってある「漢庭酒店」に向かう。ゆっくり休んで、取材で青城山に向かった1名を除く7名が11：00ホテルロビーで集合し、成都での半日を楽しんだ。

和光大学留学生だった陳佳さん（現在は結婚されて丘田佳さん）が、恵佳ちゃん、舞依ちゃんを連れて、春節の成都に里帰り中だった。お母さんの王玲さんが、成都中心街である春熙路の四川料理レストラン「柴門飯児」で典型的な四川料理をご馳走下さった。辛くて痺れる味に成都に来たことを実感。

その後、レストラン近くの「大慈寺」を一緒に見学。目下、改修中だったが、この寺は3、4世紀頃に創建され、三蔵玄奘が受戒したほか、鎌倉の建長寺を開山した蘭渓道隆　　もここで出家したそうだ。

王玲さんは私たち全員の地下鉄のチケットも購入下さって、成都の地下鉄改札口まで送って下さった。一同、大いに恐縮しながら別れ、地下鉄初体験をしながら、成都最大の道教の寺・青羊宮へ向かう。青羊宮の名は、老子が青い羊に乗ってここで教えを説いたことによるそうだ。境内の中の建物の一つ、三清殿の前には左右に羊が鎮座していて無病息災の力があるといわれ、てかてかに黒光りしていた。左側の羊は、十二支の動物の特徴を持ち、鼠の耳、牛の鼻、虎の爪、兎の背、龍の角、蛇の尾、馬の口、羊のひげ、猿の首、鶏の眼、犬の腹、猪の尻を持って十二支の特徴を寄せ集めたとある。

成都のレストラン「柴門飯児」で一行と陳さん（左から3人目）と会食。写真左端が陳さんの母親、王玲さん。

三清殿正面入口の左右に置かれた羊

夕方、ホテルに戻ると、大川健三さんは既にみえており、ホテル近くのレストランで再会を祝った。

■2月7日（火）成都からバスで丹巴に向かう

成都7：00発の丹巴往きバスに乗車。道路は高速道路から2008年の四川大地震後に新たに建設された新道を走っているようで、道幅も広く揺れも少なく快適。ただ、九寨溝方面に向かう岷江添いの道から汶川県秀映で分かれて丹巴方面に向かう谷添いの道路に入ると、道路に迫る山の斜面は削れて大きな石が道路脇まで累々と転がり落ちていて地震のエネルギーのすさまじさを感じた。新道は、山をぶち抜いてトンネ

民宿「阿妹蔵家客站」

宿のオーナー更登格西（ゲデンゲシー）さんと息子夫婦

ルを作っているようで長いトンネルを何度も通過。標高4000mを超える巴朗山（バーラシャン）峠も、かつては峠の上を走ったが今は、峠の下の長い長いトンネルの中を走った。トンネルを抜けると四姑娘山の登山基地・日隆で、以前より大きな建物が増えたようだ。2：00過ぎ丹巴着。

丹巴の町も観光ブームか、街の裏側を流れる大渡川の向側にもホテルらしき立派な建物が沢山建って町自体がかなり大きくなっていた。

夕餉の郷土料理、辛い

丹巴の町で遅い昼食をとり、チャーターした車2台に乗り換えて、丹巴甲居村の民宿「阿妹蔵家客站」に向かう。深く切れ込んだ谷に添って山を上るにつれ、車窓から、溜息が出るような美しい村々が見えるようになる。

途中、道路からテラス状に張り出した展望台で、民族衣装の女性たちが結婚式の披露パーティを開催していたので車を止めてしばらく鑑賞する。

民宿は老夫婦が経営とのことだが、切り盛りするのは息子夫婦だ。夕食には心づくしのこの地方の料理がテーブル狭しと並んだ。手作りの腸詰がなかなかの美味だ。

■2月8日（水）丹巴の村で

チャーターした車に分乗し丹巴県巴底郷邛山（ちょんさん）村の巴底官寨跡を見学。

大川さんの説明によると、「13世紀にモンゴル軍が攻め込んだ時、モンゴルの将軍の1人とギャロンの金川地方の大領主の妹が結婚。領地を分譲し成立した公国の領主の館跡といわれているが、領主編纂による記録では、領主はシャンシュン注）方面からやって来た王子とされている。館跡に有った9層の石積みの塔はチベット古代建築に共通し、随書の女国や唐書の東女国に同じ造りの「女王の館」が記録されている」とのことだ。

また、この官寨の入り口には大きなマニ車を設置した廟があり、壁に女神の姿が描かれてある。

「ギャロンで『ムルウィ』と呼ぶ土地神で、右手に生命を奪う矢を、左手に宝鏡を持ち、ヤクに乗る。これと対になる女神が近くのボン教の寺に有り、この方は、右手に宝鏡を、左手に生命を与える薬の瓶を持ち、ヤクに乗る。シャンシュン由来の女神で、本来は、生命を司る湖

左右写真とも巴底土司官寨跡

写真左：結婚式の招待に預かった面々。左端大川健三さん、右端は大川さんの甥（奥さんのお姉さんの息子）の巴華さん。大学観光科在中、将来は行政の観光に関わる仕事を希望。今回の旅では大変世話になった。写真右：披露宴のクライマックス。花嫁・花婿と両脇の付き添いの若者は、来客から祝福のハダが次々に掛けられる。

の女王で、右手に生命を奪う矢を、左手に生命を与える薬の瓶を持ってヤクに乗るが、何故か当地では異なる姿で描かれている。チベット仏教が盛んになるにしたがってこの女神は廃れ、ボン教が強く残る地域でだけ土地神として細々と伝承されている」

村の若者たちが村に戻って来る春節は、丹巴の結婚シーズンだそうで、巴底官寨跡を見学して外へでると、丁度、近くで結婚式の披露円を開催していた。大川さんがなにがしかのお祝いを包み、私たちも参加して、披露宴のご招待に預かった。

披露宴終了後、再び車に分乗して、山を下り丹巴県中路郷へ古石碉楼（ちょうろう）を見学に向かう。

土地の女神「ムルウィ」の壁画。ヤクに乗っている

丹巴は碉楼と呼ばれる塔で知られており、大川さんの話によると「現地では、古碉と呼ばれ、2000年代に入ってから幾つかの塔が年代測定され、測定された範囲では数百年～千数百年前に建てられている。約2000年前にギャロンチベット族の祖先がシャンシュンから移民した時に通った東チベットに同じような搭が残っていて、年代測定した搭の中には1800年位前に建てられた塔がある」とのことだ。

見上げる碉楼

碉楼を上ってみた。木組みに石を組み込んで建てられ、層と層は、太めの丸太に深い切り込みを入れただけの柱状の階段で繋がれている。窓も各層にはなく、中は何もなくて薄暗い。10層以上はあったようで上っても上ってもという感じだった。塔の最上部は、6畳ほどの屋上で、四隅に三角の牙のような魔除けが立てられていた。村の建物が足下にみえ眺望絶佳である。

写真提供：越後雅子、河本義宣、為我井輝忠、早坂優子、
文：田井光枝、**文中説明**：大川健三

注） 紀元前～ 643年。西チベットのカイラス山麓一帯に存在した王国　（ウィキペディア）